

無想録 四

私の周囲の者が、私の気に入らぬことをする。

私の心は怒る。

私の周囲の者が、私の真意を誤解する。

私の心は怒る。

立腹、寂寥、愚痴……あらゆる感情が頭を持ちあげる。そしてそれらが言う。

「私に勝たしてください。」

苦しい胸をじつと抱く。涙さえ流れる。ひとりで悶える。だが、私の魂の中から爆発する。

「怒ってはならない！」

魔軍一時にどこかに退散。天地もとのごとく晴朗。

私憤は人物を小さくし、事を破壊し、世界を狭くする。

公憤は人物をつくり、社会を改革し、万人に幸福をもたらす源泉となる。

「怒りは敵と思え」という。しかし何がどうなっても怒りもし得ないような人間が何になる。

不正義が通り、弱者が虐げられても、公憤も感じなければ、感激もないところに何の生活があり得るか。

煮ても焼いても食われない人物になれ。金でも食われず、地位でも食われず、悪罵にも好評にも火にも水にも動かない人物になれ。何かを怖れるものに何ができるか。

男！ 男だというのか。もつと線の大きい男になれ。それくらいのこと悲しみ、それくらいのこと驚き、それくらいのこと倒れるのか。

小さい感情、それもいい。繊細な注意力、それもいい。だが、その背後に山をも抜く太さがある。

汝が起つて不正と戦い、虚偽を滅ぼし、弱者のために血路を進むことは、やがて恵まれざる大衆の幸福を開拓するのだ。

君たちは、民衆の開放を叫ぶと言いつつ、なぜもつと自制しないのか。なぜ、その日常生活が常識を裏切るような変奇的なものなのか。その髪を、その服装を、その言葉を、そして社会的礼儀を、なぜもつと通常人のごとくしないのか、そしてなぜもつと、だらしなさから出ないのか。君たちの運動自体を社会から隔離するじゃないか。

昔、高山樗牛は「吾人は須く現代を超越せざるべからず」と叫んで、明治の青年の心を動かした。それよりもまず「吾人は、われを超越せざるべからず」と叫ぶ。われを超越するとはわれを真に知ることである。われを真に生かすことである。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」とは、真に「あつい！」と言うことだと慶沢和尚は言う。火

の中に入って真にあついままに火を超え、寂しき苦しきの中にあつて、それを超え、善悪の中にあつて善悪を超え、やがてわれ自らさえ超えるところに真にわれが生きる。

真の涼味は汗の中にある。活動の中にある。

真の安心は、大活動の中にある。

真の静けさは、動乱を動乱として動乱の中に処してゆく心の中にある。

宗教的な信も安心も、ただ生活の中にある。

汝を守るものは汝である。汝らの世界を守るものも汝らである。汝を単なる涙から救え。そして起て、汝が衷心の信に起ち上がる時、汝を責める虎だと思つたものが猫にかわる。汝の心に金剛の意志が生まれ、汝らの世界に団結が生まれた時、汝らの世界は守られる。

不合理な存在の城にたてこもる百千の男は、正しさの上に立脚する一女性よりも弱い。権力は最後の力ではあり得ない。

宗教の安心境は、現実ありのままの中に全我を托しきつて生死苦樂一如の世界に見出される。しかしこの全我投托の安心境をはき違えて、無気力なあきらめ主義や、盲目的屈従だと考えるならば大変な間違いである。

多くの祖師たちはその時代での正しさを守るために、真実を顕わすために勇敢であった。みな流罪をも牢獄をも迫害をも厭わぬ、獅子奮迅の意志の持主だった。彼らはみな、時代の異端者だったのだ。

「自分を祖師になぞらえるほど高慢であつてはならない」という独善、偽善の城に卑怯にもたてこもつてはならない。

正しさを顕わすことは、最上の破邪である。

破邪は時に悪罵におわる。あらゆる世界に顕正せよ。民衆は愚に見えて、これほど正しいものはない。顕正の旗を民衆の中に立てよ。